

# vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] vol.252

# 11-12

November & December 2022



Mitsuko Uchida

©Richard Avedon

特集  
SDGS  
ドイツ・リートの魅力と  
02



Mark Padmore

©Marco Borggreve

- 06 店村真積 ヴィオラ・リサイタル
- 08 ミシェル・ブヴァール オルガン・リサイタル
- 10 クリスマス・プレゼント・コンサート
- 12 INFORMATION

水戸芸術館  
ART TOWER MITO

# ドイツ・リートの魅力とSDGs

文:喜多尾道冬(音楽評論家)

現代のわたしたちは地球温暖化の難題に直面している。平均気温がわずかに1、2度上昇しただけで北極や南極の氷が融け出して海水面が上昇し、水没する島嶼も出かねないという。安定的に推移してきた気候が極端な乾燥と降雨を引き起こし、広範囲な森林火災が発生したり、洪水に襲われたりする。わが国でも「経験したことのない」猛烈な降雨による河川の氾濫が各地で多発しはじめている。

農作物や水産物もおなじ。北海道が有力な米どころになり、海でも大量の漁獲が見こまれた海域でお目当ての魚影が消え、別の魚が姿をあらわすなどの異変が起きている。わが国は地球温暖化の影響で南洋化、熱帯化する気配がただよう。さらに産業廃棄物やわたしたちひとりひとりの出すゴミは自然の浄化力の限度を超えつつある。いったいこの先どうなるのだろう。

それが、ここでとり上げるテーマ「ドイツ・リートの魅力」となんの関係あるの?と問われかねない。ところが大いに関係がある。

地球温暖化の原因は産業革命とじかに結びついている。産業が家内手工業から工場制手工業へ、さらに工場制機械工業へと発展してゆくなか、「もの」の大量・均質・迅速な供給を担保すめるために蒸気機関の利用がはじまった。蒸気力を得るには火力が必要だ。そのために化石燃料の大量使用がはじまった。この火力の発する熱が積もり積もって今日の地球温暖化につながってきたわけだ。

産業革命がアンシャン・レジームを崩す導火線になり、フランス大革命は

その枠組みを爆破するダイナモになった。そして貴族や僧侶からなる上流階級に代わって市民階級が政治の実権を握る事態に到ったのはだれもが知るところだ。

新しい市民理念は「自由・平等・友愛」を謳い、芸術もそれに呼応する。ハイドンやモーツァルト、ベートーヴェンら、ウィーン古典派の音楽はそれを土台にしている。高邁な市民理念が打ち立てられた後に登場してきたのがシューベルトである。彼はベートーヴェンに伍す大作曲家になろうと志しながら、一足遅れたために時代のモードは移り変わり、理念という大文字の「総論」に代わって、市民ひとりひとりの幸せをどう実現するかという「各論」に応える時代に生きていた。

彼の作曲活動のメインはリートにあった。リートの誕生は象徴的に彼の〈糸を紡ぐグレートヒェン〉が作曲された1814年10月19日に特定される。とってそれまでにリートがなかったわけではない。歌は民謡やバラード、宗教歌、アリエッタなどの形でたのしまれていた。実際シューベルトが声楽曲に手を染めたはじまりはバラードだった。

ところが産業革命の発展によって都市に工場が増えてくると、農村で四季のおおりにたのしまれていた民謡はなじみにくい。代わって新しい都市環境になじむ歌が求められるようになる。それがリートだった。

リートといえば当時幅をきかせていたのがベルリンに拠点をおくプロイセン宮廷楽長のライヒャルトや、ベルリン・ジングアカデミーの指揮者ツェルターらのベルリン・リート楽派だっ

た。ライヒャルトはシューベルトの600曲をはるかに上まわる1500曲ものリートをものし、ツェルターは200曲と数こそ少ないながら、ゲーテの音楽顧問として名をなしていた。

ゲーテの住むヴァイマルはベルリンと指呼のあいだにあり、ベルリン・リート楽派は大詩人の大きな影響下にあった。歌の場合、詩と音楽のどちらが上か、つねに優劣争いがつきまとう。ゲーテのご成光は絶対だった。当然詩が優先して彼は音楽を詩の暗唱の補助くらいにしかに見ていなかった。それでもベルリン・リート楽派はご無理ごもつもと、ゲーテのご意向に唯々諾々としたがっていた。

ヴァイマルから遠く離れたウィーンに住むシューベルトはそんな力関係を知るよしもない。内気な彼は友人たちから尻を叩かれ、〈魔王〉や〈野ばら〉〈糸を紡ぐグレートヒェン〉など、ゲーテの詩に付曲した選りすぐりのリートをヴァイマルに送った。ところがなんのコメントもなく送り返されてきた。なにが原因なのだろう。彼の知れなかった理由を別の経路でわたしたちの知るところとなる。

後にシューベルトが自作のクラリネット伴奏つき歌曲〈岩の上の羊飼ひ〉を献じた歌手シュレーダー＝デフリースはシューベルトの〈魔王〉をゲーテの面前でうたったことがある。そのとき彼は「ぞっとする」と顔をしかめた。彼は自作のバラードをライヒャルトやツェルターの付曲で聴き慣れていた。というより彼の求めにしたがって詩の暗唱の負担軽減を図るとすれば、リートは各詩節をおなじメロディで繰り返す有節形式が望ましい。

ゲーテはその上詩の韻律に正しく





ウィーン市立公園のシューベルト像

したがうことも求めた。そうすれば詩の暗唱はたしかに軽減される。ところが詩自体は詩節ごとに内容を変化させ物語的に発展してゆく。シューベルトは韻律にしたがうよりも物語の展開を重視して詩節ごとにメロディの変わる通作形式を選ぶことが多かった。

ところが〈魔王〉のような8詩節もあるバラードのひとつひとつの詩節をすべておなじメロディで繰り返して歌うのを耳にするのは耐えがたい。にもかかわらずゲーテは暗唱のしやすさと韻律にこだわり、シューベルトの通作形式に拒否反応を示したのだろう。

シュレーダー＝デフリースはシューベルトの死後、ふたたびゲーテの面前でおなじ〈魔王〉をうたったとき、ゲーテは「情景が眼に浮かぶようだ」とかつての嫌悪感を一転させて称賛した。彼は遅まきながら自分の詩の物語展開に彼の作曲の方がふさわしいのに気づいたわけだ。

こう言い換えられる。有節形式はかつての四季の変化にしたがう農村共同体の円環的な復讐に似合う。一方、通作形式は産業革命の進展につ

れて円環から飛び出して未来に向かって右肩上がりの直線を描く都市の膨張と軌を一にする。

シューベルトのリート〈糸を紡ぐグレートヒェン〉は変形有節形式で作曲されている。曲は『ファウスト』の挿入歌で、グレートヒェンは彼の子を宿しながら捨てられ、糸を紡ぎながら彼の面影を追う情景を映している。ピアノは糸を紡ぐ糸車の音を模し、その回転は彼女の出口のない思慕の空回りと重なる。つまりピアノは情景と心理の二重描写を行う。その画期的な手法がドイツ・リート誕生の瞬間と言わしむることにつながった。

それだけではない。グレートヒェンは生まれた児を抜いかねて殺さざるを得ない。嬰兒殺しは当時重罪だった。ゲーテは公開斬首される嬰兒殺しの女を眼にして、女だけでなく相手の男にも相応の責任があるはずなのになぜ男が不問に付されるのか疑問を抱いて、それが『ファウスト』を書くきっかけになった。

ゲーテの詩によるシューベルトの〈野ばら〉にも似たジェンダーの問題がひそんでいる。ゲーテは郊外を馬車で乗り回しているなか、可愛い娘を見

かけると馬車に引っぱりこんでことにおよぶことがあった。でもなかには抵抗する娘もいただろう。〈野ばら〉は男の子が野原をたのしげにスキップしながらふと見かけたばらをちよつといいなと手軽に折りそのまま捨ててしまう。ばらは抵抗して刺でさす。へっちゃらな男の子もいるだろう。でもゲーテの心に傷が残った。その痛み近代意識のはじまりがある。男性優位の社会へのじくじたる念が男の側にきざしはじめていた。

当時は「自由・平等・友愛」の理念が高々と掲げられていた。でもジェンダーの差別の根はしぶとく残り、200年以上たった現在でも改善がはかばかしくない。それどころか幼児虐待や子殺しがいまもって絶えないのに暗澹とする。

ドイツ・リートはジェンダーの問題と並んで、今日喫緊の課題になっている環境汚染の問題とも深くかかわっている。リートは都市の新しい市民の娯楽のひとつになったと前述した。でもリートを盛る器となる詩は田舎の素朴な民謡やバラードではもはやあり得ない。また知識階級がたのしんでいたソネットやアレクサンドランといった高度な技巧を必要とする詩もそぐわない。その隙間を埋める中産階級の生き方にふさわしい詩を必要とした。それが抒情詩となって登場してくる。

都市の市民たちはゆたかなものに囲まれた便利な環境を謳歌する。でも大量消費社会の吐き出す煤煙やごみ、人混み、不衛生な環境汚染に悩まされはじめてもいた。そのことに心を痛める人々がその対立を食い止めたとい、両者の調和の理想を模索するようになる。新しい市民理念の裏で、「自然と文明」との調和を芸術によって目指す動きがはじまる。

ゲーテの詩はその動きと呼応する。彼は知識階級に属していたが、ジェンダーの差別に敏感だったように、多くの人々が不衛生な環境のなかで、「隣はなにをする人ぞ」と孤立して、精神を病むものも出てきかねない状況から眼を逸らすことができなかった。

彼は都市の市民たちが自然と親しみ、その治癒力で人間らしさをとり戻せる手立てを模索する。そして自然が孤立と疎外を緩和し、人間同士の愛を育む力になると見た。彼の「月に寄す」や「湖上で」などの詩では失恋の苦しみや悲しみは自然の奥深い治癒力で癒される。「恋人のそばに」では自然を通してこそ恋人と深くゆたかに結ばれる。

彼の抒情詩は現在でいうレクリエーションを自然への愛という形であらわしたものだ。都市の市民は彼の抒情詩を通して失われゆく自然にふれ、そのなかで疲弊した心を癒され、リフレッシュしてふたたび前向き生活にもどることができた。彼の抒情詩では自然と都市との調和が目指されている。

シューベルトが作曲した〈月に寄す〉や〈湖上で〉〈恋人のそばに〉はま

さに両者の調和の理想に呼応する。彼はゲーテの詩にいちばん多く作曲している。でも他の抒情詩へのすぐれた付曲も少なくない。〈夕映えのなかで〉や〈緑のなかへ〉〈戸外で〉〈岩の上の羊飼ひ〉、星をうたった数々のリートは自然との美しい親和をひびかせている。

わたしははじめて〈夕映えのなかで〉を耳にしたとき、こんな美しいメロディの音楽があったのかと心を奪われ、それがシューベルトのリートにのめりこむきっかけになった。シューベルトは夕方になるとよくウィーンの郊外を散歩して沈みゆく夕陽をうっとり眺めた。〈夕映えのなかで〉に自然となじむ彼の日々のひと齣が隈どられている。

彼のリートのメロディはこの曲にかぎらず、どんな作曲家にも増して美しい。それは自然と都市のあいだに虹のような弧をかけ、両者の理想の調和を生み出そうとする切なる願いから生まれている。

シューベルトやゲーテの時代には自然と都市との調和を夢見る余地がそれでもまだ残されていた。でもハイネやリッケルトなど、シューベルトが

晩年になって出遭った抒情詩人たちは、産業社会の進展が思った以上に急激で調和に疑念を抱きはじめていた。ハイネは両者の分裂を鋭く見つめ、その対立を「世界苦」と感ずるほどにさえ到っている。シューベルトもかつての調和の理想から一転して彼の詩による〈影法師〉や〈都市〉〈彼女の肖像〉などでその行き詰まりを凝視せざるを得なくなった。

リッケルトもはじめのうちは空気に近い楽天性で調和を描き出し、シューマンの歌曲の守護詩人になったが、晩年は悲観的になり、ベルリン大学の教授だったにもかかわらず都会の喧騒や汚染を嫌い、職を辞して空気の澄んだ田舎に引っこんだ。マーラーが彼の詩に作曲した〈この世から忘れ去られ〉はその諦めの心境をなぞっている。

ブラームスもその仲間だ。彼も都会の喧騒と汚染を嫌い、シューベルトよりも以前の草深い里山に憧れ、そこに還って行こうとした。そのため彼のリートは素朴な民謡に近づく。そしてそのなかでゆっくりくつろごうとした。

都市と自然との離反が決定的になったのが世紀末のこと。ならば逆説的に自然を疑似的に都市のなかにとりこむのはどうか。そのアイデアから生まれたのがユージュント様式である。これは人工的で合理的な直線の組み合わせからなる都市の表面を唐草や水草といった自然めかしたなめらかな模様で飾り、都市の住民に安らぎを感じさせようとする手法だ。

ほんらいは美術上の運動だが、ヴォルフやマーラー、R.シュトラウスらはこの様式を自分の音楽に流用した。ヴォルフの〈園芸師〉や〈エオリアン・ハーブに寄す〉〈ヴァイラの歌〉など、またR.シュトラウスでは〈セレナーデ〉や〈明日は!〉〈たそがれの







©Marco Borggreve



©Decca Justin Pumfrey

夢)などにこの様式があてはまる。

なかでもマーラーはこの様式にのつとった《リュッケルト歌曲集》を作曲しながら、一方で自然との離反に心を引き裂かれる思いをして、かつてのボヘミアの彼の古里を思わす『少年のふしぎな角笛』など民謡の世界へ還ってゆこうとした。〈緑の野をたのしく歩んだ〉や〈ラインの伝説〉〈この歌をつくったのはだれ〉などに失われた牧歌への憧れの念が聴きとれる。

19世紀のドイツ・リートは、人間が自然から引き裂かれ、都市のなかで孤立してゆくなか、ひとりひとりの小さな胸のなかでいかに両者を調和させられるかという試行錯誤の連続だった。現代風に言い換えれば、リートという形を借りた心のケア、またSDGsの試みに近い。

もちろん当時は現代のような自然破壊や環境汚染へのさし迫った危機意識はなかった。でも自然と人間の離反が進行しつづければどうなるか、それをひとりひとりの心の問題として受けとめ、融和策を試みてきたのがリートだった。

現代の地球温暖化や環境汚染はもはや個人の意識と心のもちょうだけでは、またリュッケルトやブラームスのように田舎に隠遁する消極的な手立てだけでは自然と人間の共存を図れない事態に立ち到っている。焼石に水かもしれないが、SDGsを心掛けることで破滅へ向かいかねない現状に歯止めがかけられると期待し努力する、そこにドイツ・リートの試みが重なると思われてならない。

11月17日に水戸芸術館で公演される「内田光子&マーク・パドモア」のリサイタルに現代に通ずるリートのSDGsが感じとれるのではないか。

ベートーヴェンはシューベルトとおなじ時期にウィーンで暮らしながら、「自由・平等・友愛」の市民理念のなかで生きていた。だから都市の汚染にまで眼が行かず、彼のリートは清らかな自然のなかで悠然と憩い、その讃歌に終始する。今日の眼からするとその理想は絵に描いた餅に見えかねない。でもそこに純な自然が望まれるのはまぎれもない。とくに連作歌曲集《はるかな恋人に》には純な愛は自然

の澄んだ空気とのみ美しく親和し合えるという想いと願いがこもっている。

一方の《白鳥の歌》はハイネとともに「世界苦」を凝視している。現在のわたしたちも自然のあるべき理想と現実のはざまにおかれている。当日のプログラムはこの問題をとくに目指したわけではないとしても、はからずも自然と人間の関係を見直すようになるのではなからうか。

#### ■公演情報

### 内田光子&マーク・パドモア

2022.11.17(木) 19:00

全席指定 A席¥12,000、B席¥10,000

#### ●プログラム

ベートーヴェン:

希望に寄せて(第2作)作品94

あきらめ WoO 149

星空の下の夕べの歌 WoO150

遥かなる恋人に 作品98

シューベルト:

歌曲集《白鳥の歌》D957、D965a

# 秋の深まりと、ヴィオラの音と、ブラームスの室内楽と 店村眞積(ヴィオラ)インタビュー

聞き手: 関根哲也



ラ、水戸室内管弦楽団、桐五重奏団で30年来の仲間であるし。上村さんは、僕がフィレンツェのテアトロ・コムナーレのオーケストラにいた時に、カサド国際チェロ・コンクールを受けにきて(1979年)、そこで1位をとって、僕の家でお祝いしたりして、それからの付き合いです。山本さんも長いです。一緒にサイトウ・キネン・オーケストラで弾いたり、室内楽をやったり。淳君(村上淳一郎さん)は彼が中学2年の時、僕の友人が教えてやって欲しいと連れてきてね。その時はおかつ頭の坊やで可愛かったの。それが今は1m90cmくらいの長身でしょ。

た時に、楽器を変えて勉強しなおした方がいいと思って、それでヴィオラへ転向しました。22歳の頃に、齋藤秀雄先生から「ヴィオラを弾きなさい」と言われ、反発して「あんな楽器、大嫌いだ」とか言い返していたんだけど、結局はそうなっちゃって。人生どうなるかわかりません。ヴィオラのイメージを覆してくれたのは1972年にイタリア弦楽四重奏団が初来日した時。東京文化会館に演奏会を聴きに行っただが、あまりにも素晴らしくてびっくりして。またそのヴィオラの音にもびっくりして。音の通り方、響き方がもう全然違って、ヴィオラってこんなに素晴らしい楽器なのかと。その奏者がピエロ・ファルツリ先生。ですから僕がヴィオラに転向しようと思った時、ファルツリ先生に教わることしか頭になかったですね。まったくの偶然なんですけど、当時、僕の妹がフィレンツェでピアノを原智恵子先生に習っていたので、探して欲しいと頼んだら、ファルツリ先生は原先生の親友でフィレンツェにいますので、すぐに話がまとまりました。ヴィオラ転向を決めて1週間後にはフィレンツェにいたなんて、今でも信じられないくらいです。

——いよいよリサイタルが近づいてきましたね。

今までリサイタルはたくさん行ってきましたけれども、室内楽を入れた形でのリサイタルというのは初めてですね。昨年、関根さんから「室内楽も入れたらどうですか」という話をいただいた時に、ああそういうこともできるのかと思って、メンバーを考えました。前半にブラームスのソナタ2曲を弾きます。練木さんは素晴らしいピアニストで、彼と組んでいればもう安心です。レコーディングも一緒にしていますしね。後半はやはりブラームスの第1番の弦楽六重奏曲にして、素晴らしいメンバー、それも全員水戸室内管弦楽団にも関わりのある人たちが集まってくれることになりました。フェデリコさんは、彼が20代の頃からの付き合い。1980年代には一緒に日本でコンサートのツアーもやりました。最近、彼は会うたびに11月のコンサートのことばかり話しています。中村静香さんはサイトウ・キネン・オーケス

——村上さんは、水戸室内管弦楽団のフィレンツェ公演の時(2008年)にちょうど向こうにいらして、ヴィオラの有望株とのことで私たちもお話を伺ったりしました。

その頃にはもう活躍してましたよね。トリエステとかヴィットリオ・ゲイのコンクールで優勝して、その後ケルン放送交響楽団のソロ奏者になった。あそのオーケストラですっとソロ奏者をやっていたってというのは相当すごいですよ。昨年秋からN響の首席になりましたね。彼にもずっとヴァイオリンを教えていて、大学3年でヴィオラに転向させました。

——店村さんもヴァイオリンからヴィオラに転向なさっていますが、どのようなきっかけがあったのでしょうか。

もう一度ヴァイオリンを一から勉強しなければこの上には行けないと感じ

——ファルツリ先生のレッスンで、特に印象に残っていることはありますか。

僕はテクニク的にどうこうと言うより、ヴィオラというものを教えてほしいと思っていました。ファルツリ先生は、ヴィオラは音色だとおっしゃり、それは納得するんだけど、彼は180か190cmもある大男で、彼の小指は僕の人差し指より大きいし、中指は僕の

親指くらいの太さがあるの。その人が柔らかく弾いてごらんと言っても、僕は条件が違いすぎる。おまけに、僕より小さい楽器を使ってるのね。そうすると、根本的に音をどう集中して作るかということが違ってくるんですね。そういって先生とぶつかったことはいっぱいあります。でも、僕はヴィオラにかけていて、年から年中楽器しか持たず、1日に10時間、11時間と練習していました。先生もびっくりして、少しは休めと家に招待してくれて、ごちそうをふるまってくれたこともありました。すごく優しい先生でもありましたね。その時、自分は演奏会が近いからちょっと練習するねと言って上の練習部屋に行かれたのですが、僕はそれをずっと見ていました。3時間、伴奏の刻みだけ。イタリア弦楽四重奏団は暗譜で演奏会をやっていて、60曲くらいは全て頭に入っている。それで、楽譜は見ずに伴奏の刻みのところだけずっと練習していました。あんな忍耐力、見たことがありません。僕にとっては、先生というより、すごい生き様を見せてくれた親父みたいな存在でした。イタリア弦楽四重奏団は本当に素晴らしかったけれど、もう少し使う楽器にこだわってくれたらいいのにな、と思うことはよくありました。楽器が傷んで、普通の演奏家なら真っ青になるくらいのひどい状況でも、まったく気にしない人たちでしたから。

— 店村さんは、楽器にどのようなこだわりをお持ちでいらっしゃいますか。

弦楽器は音色だと思っています。ただ作った音ではなく、「声として聞こえるような音」でなければなりません。特にヴィオラの場合は身体に豊かに響いてくる音が欲しいですね。だから、楽器選びは重要だと考えています。僕が



使っている楽器はアレックスandro・ガリアーノが1723年にナポリで製作したもので、もう30年くらい弾いています。1911年にロンドンで解体した履歴があって、体格の小さな人が弾いていたのか、サイズを小さく改造してあったんですね。それを日本にいたフランス人の製作者がもう一度楽器をバラバラにして、オリジナルのサイズに戻してくれました。ものすごい腕を持つ職人です。修理が完了して、初めて弾いた時はびっくりしましたよ。僕が一番欲しかったような音が出たので。写真にも写っている楽器ですけど、ものすごくいい楽器です。たまには浮気もしますが(笑)、楽器を変えるつもりはありません。弓にもこだわっていて、あまりそこまでやる人はいないけど、毛替えも自分でやっています。例えば〈ドン・キホーテ〉のソロの時は、この毛で、この分量で、このバランスでという自分なりのこだわりがあるんです。お馬さんからいい毛が取れて、それを手に入れても、縮毛があったり、枝毛があったりするから、1本ずつ選んで、1本ずつ捨てて。普通だったらそのまま使う毛のうち、3分の1くらいは捨ててしまう。そのくらいやると、張った時にわかります。これは絶対いい音が出ると。それは自分の音、自分の声につながりますから。ただ単に出てくる音で済ましていたら、音楽自体聴こえてこないでしょう。

— 室内楽でヴィオラはどんな役割を担っていますか。

ヴィオラはフランス語で言うところのalto。

声のアルトと同じ。中間で一番沈みやすい。しかし、高音域と低音域を両方支えているんですよ。その魅力というのがヴィオラの音なのです。ヴァイオリンの一番上のE線は全然ヴィオラには関係ないけど、2番目のA線は僕らの1番上の線。ですからヴァイオリンの中音域がヴィオラの高音域になり、ヴァイオリンと一緒に同じ音を弾いた時には、ヴィオラの方がacuto(高声音)になる。逆に、ヴィオラの中音域はチェロの高音域になるので、ヴィオラの方が低く厚い響きになる。こういう感じで、ヴィオラの音というのは共有している音域で作っていかないと駄目なんですね。上のヴァイオリンにも下のチェロにも自由にお弾きなさいと言いながら、真ん中をヴィオラ独特の音色で締めていく。アンサンブルには、そういう面白さがありますね。今度のリサイタルでは、ヴィオラの音とともに、アンサンブルでのヴィオラの役割にも注目していただければ嬉しいです。

9月27日

協力:KAJIMOTO

#### ■公演情報

#### 店村真積 ヴィオラ・リサイタル

2022.11.12(土) 16:00  
全席指定 一般¥5,500、  
U-25(25歳以下)¥1,800

#### ●共演

練木繁夫(ピアノ)、フェデリコ・アゴ스티ーニ(ヴァイオリン)、中村静香(ヴァイオリン)、村上淳一郎(ヴィオラ)、上村昇(チェロ)、山本裕康(チェロ)

#### ●曲目

《オール・ブラームス・プログラム》  
ヴィオラ・ソナタ 第1番 へ短調 作品120の1  
ヴィオラ・ソナタ 第2番 変ホ長調 作品120の2  
弦楽六重奏曲 第1番 変ロ長調 作品18



# セザール・フランク前後のオルガン音楽の魅惑

## ミシェル・ブヴァール インタビュー

聞き手:高巢真樹



フランス・オルガン界の巨匠であり、ヴェルサイユ宮殿王室礼拝堂の首席オルガニストとしても長年活躍されているミシェル・ブヴァールさんにインタビューさせていただきました。ブヴァールさんをお迎えするのは、2014年のリサイタル以来、8年ぶり。いま改めて考える音楽の意義、生涯200年を迎えるセザール・フランクについてなど、貴重なお話を伺いました。

—このたび久しぶりにブヴァールさんと康子夫人をお迎えますことを嬉しく思います。私たちはこの数年、世界的規模のパンデミックを経験し、数々のコンサートを中止せざるをえない状況におかれました。そうした時期を経て、人間にとっての音楽の意味をどうお考えでいらっしゃいますか。

音楽家にとっては切っても切り離せないテーマですね、ご質問ありがとうございます。人間にとって音楽や芸術は、特に困難な生活を余儀なくされている時ほど、本当にかげがえのない存在だと思います！音楽は苦悩から自らを引き剥がすことを助け、内面の苦しみをしばし忘れさせてくれます。そして感情を揺さぶり、自らの本質に立ち返らせてくれるのです…。また音楽にふれて、感極まり涙することもありますよね。ときには涙を流すことも、気分が良いものだと思いますか！音楽は、痛みを相対化し、再び前向きになるのを助けてくれるものだと思います。

—生涯200年を迎えるセザール・フランクは、オルガン音楽史においてどんな位置づけにあるのでしょうか。

またオルガン音楽に革新をもたらした、フランクと同時代のフランスのオルガン製作者、カヴァイエ＝コルとの関係についてもあらためて教えてください。

セザール＝オーギュスト・フランクは、1822年にベルギーのリエージュで生まれました。オランダやドイツとの国境に近く、主にフランス語が話されている地域です。若きセザール＝オーギュストは、さまざまな音楽の影響を受けています。例えば彼の音楽修行には、明らかにベートーヴェンやシューマン、シューベルト、メンデルスゾーンの美的感覚が反映されています。もちろんJ.S.バッハもそうですし、移住先のパリではリストやショパンからも影響を受けています。そして1859年、サン＝クロチルド教会の正オルガニストに就任しました。そこには当時のオルガン音楽界におけるもう一人の天才、オルガン製作者であるアリストイド・カヴァイエ＝コル(1811～1899)が作った、傑作と呼ぶべきオルガンがありました。この楽器に触発され、またリストからの助言も得て、フランクは1864年に6つの小品を書きました。この非常に優れた作品集によって、フランスのオルガン音楽の水準は高まり、大きな恩恵をもたらしました。今回は、その中で最も有名なく前奏曲、フーガと変奏曲)を演奏します。

1878年には、カヴァイエ＝コルはパリ万博の会場だったトロカデロ宮殿のために、大規模なオルガンを製作しました。今度はその楽器との出会いを機に、フランクは3つの小品を作曲しました。



そして晩年のフランクは、再びこのパイプを鳴らす楽器のために創作的欲を燃やし、オルガンのための〈3つのコラール〉という宝物を音楽の世界にもたらしてくれたのです。各曲はいずれも大規模なフレスコ画のようです。いくつかのメインテーマが並置され、重ね合わされ、ベートーヴェンの作品とも肩を並べる高度な芸術性を有しています。しかし曲の中にはモリエールの演劇のように、多数の「脇役」的なフレーズも登場します。それらはささやかな存在ですが、作品の統一感を保つために度々登場します。今回私が演奏するのは〈コラール 第3番〉。一聴して輝かしく、詩的で、ドラマティックな音楽です。1890年9月に作曲されたフランク最後の作品で、彼はその数週間後に天に召されました。

—今回は、ドイツとフランスの音楽を織りませたプログラムをご提案くださいましたね。そして祖父ジャン・ブヴァールさんの作品も演奏していただきます。

今年がフランクの生誕200年ですが、プログラムをフランクの曲だけにしたくはありませんでした。それよりもフランク以前／以後に書かれたフランスやドイツの音楽も取り上げた方が、より興味深いリサイタルになると思いました。フランクは、作曲家としてはドイツから、オルガニストとしてはフランスか



宇山＝ブヴァール康子

ら影響を受けています。また後世に活躍した作曲家も、フランクから大きな影響を受けています。

私はヴェルサイユ宮殿の王宮礼拝堂オルガニストを務めているので、ルイ・マルシャンの〈グラン・ディアローグ〉で演奏会を開始できることを嬉しく思います。偉大なルイ14世時代のフレンチ・スタイルを想起させる曲です。そして妻の康子と編曲した3手の連弾で、フランソワ・クーブランによる2つの〈ミュゼット〉をお届けします。原曲では2つのチェンバロのために書かれています。J.S.バッハの作品は「必須」ですが、今回選んだのは、私の恩師、アンドレ・イゾワールの素晴らしい編曲による〈4台のチェンバロとオーケストラのための協奏曲〉、そして〈G線上のアリア〉です。そしてモーツァルトの〈管楽器のためのディヴェルティメント〉(オルガン編曲版)を演奏します。これはモーツァルト自身による4手のピアノ編曲版に基づいたものです。

後半は再びフランス音楽に戻ります。フランクのあとは、リヨンで作曲家・オルガニストとして活躍した私の祖父、ジャン・ブヴァール(1905～1996)による2つのノエルを演奏します。フランスのオルガニストが古来からそうであったように、彼も、フランスの地方で親しまれている様々なクリスマス・メロディを作曲に使うのが好きでした。そして、メシアンが1934年に作曲した傑作〈主の降誕〉の最後の曲〈神はわれらのうちに〉を演奏します。

—最後に、お客様にメッセージをお願いいたします。

2014年に初めて水戸芸術館でお



ヴェルサイユ宮殿王室礼拝堂で演奏するブヴァール氏

こなった音楽会は、今でも大切な思い出となっており、今回再び水戸に伺えることを嬉しく思っています。その後8年がたち、世界は随分と変わりましたね。そして私の妻・康子との連弾もとても楽しみです。初来日から40年以上たちますが、家族に会いに、よく来日しています。今回はセザール・フランクを中心に、魅力的でオリジナリティのあるプログラムをデザインしました。ぜひ音楽を愛する多くの方々にお越しいただき、一緒に「音楽を共有する」ひとときを過ごしていただきたいです。私は心から日本が大好きなので、皆さんのために演奏できるのが本当に光栄で、嬉しく思っています！

2022年9月6日

協力：日本アーティスト

■公演情報

ミシェル・ブヴァール  
オルガン・リサイタル

2022.11.13(日) 19:00  
全席指定 A席¥4,000、B席¥3,500  
U-25(25歳以下) ¥1,500

●共演

宇山＝ブヴァール康子(ゲスト)

●プログラム

マルシャン：グラン・ディアローグ  
J.S.バッハ：  
4台のチェンバロのための協奏曲 イ短調  
BWV1065(☆)  
モーツァルト：  
ディヴェルティメント 変ロ長調 K.240(☆)  
フランク：前奏曲、フーガと変奏曲  
ジャン・ブヴァール：  
バスク地方のノエルによる変奏曲  
メシアン：主の降誕 より IX. 神はわれらのうちに  
ほか

☆：連弾曲

# クリスマス・プレゼント・コンサート2022 聖夜に贈る、満ち足りたひと時

文：鴻巣俊博

水戸出身の作曲家・池辺晋一郎さんの企画・おはなしでお贈りする毎年恒例の「クリスマス・プレゼント・コンサート」。コロナ禍から少しずつ以前の生活に戻りつつある今、世界は平和を希求する声に満ちています。今年のこのコンサートは平和への願いや祈りも込めた曲も交え、1年の締めくりにふさわしい満ち足りたひと時をお届けします。

## 彼方に届け、はじける歌声

「クリスマスにはコーラスでクリスマス・ソングを聴きたい!」という皆様、お待たせいたしました。今年は「クリスマス・プレゼント・コンサート」3年ぶりの合唱、NHK水戸児童合唱団のステージで幕開けです。2005年の創設以来、コンテストへの出場や地域のイベントやオペラへの出演を重ね、地元の皆様が親しまれているNHK水戸児童合唱団。コロナ禍でも試行錯誤しながら練習し、昨年5月に当館で開催した定期演奏会では、元気と希望を与えるステージを披露しました。今回は〈サンタがまちにやってくる〉や〈ジングルベル〉などのお馴染みのクリスマス・ソングだけでなく、遠い地に想いを馳せる歌がプログラミングされています。

〈鐘のキャロル〉は、ウクライナの作曲家ミコラ・レオントヴィチ(1877~1921)が、故郷の民謡〈シュチェドリック〉(豊かな夜)を編曲した合唱曲。後に英語詞がつけられ、〈Carol of the bell〉という名で世界中に広まりました。クリスマスを舞台にした映画「ホームアローン」をはじめ、映画やテレビでよく耳にするこの曲がもともとウクライナ民謡だったとは意外に思われる方も多いかもしれません。このステージの最後には、日本の唱歌(故郷)のウク

ライナ語版をお届けします。歌詞を訳したのは、ウクライナの民族楽器バンドウーラ奏者のナターシャ・グジーさん。2013年の「クリスマス・プレゼント・コンサート」にも出演した日本在住の演奏家です。「日本とウクライナの架け橋になりたい」と語るグジーさんがしたためたウクライナ語の歌詞にのせて、子どもたちが平和への想いを届けます。

## 琴線に触れる深き音色



第2ステージには昨年デビュー15周年を迎え、持ち前の歌心と深い音色にますます磨きがかかる人気チェリスト・新倉瞳さんが登場します。バロックから現代音楽まで幅広いレパートリーを誇り、2020年度にはチェリストの登竜門といわれる齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞して注目を集めました。ソリスト、室内楽奏者としてだけでなく、演奏家用のドレスのプロデュースも手掛けるという多才な新倉さんが近年活動の軸の1つとしているもの、それはクレズマーです。

クレズマーとは、東欧のユダヤ人楽師たちが奏でる伝承音楽の総称。この単語自体はヘブライ語の「クリ kley」(器)、「ゼメル zmer」(歌)に由来し、中東欧に住んでいたユダヤ人の中で楽師を指す言葉として17世紀に使われ始めたといえます。現在のように音楽ジャンルを指すようになったのは20世紀に入ってからと比較的新しく、1970年代ごろから、昔はどのように演奏していた

のかという研究が進みました。なにしる楽師たちの間で受け継がれてきた伝承音楽なので楽譜はほとんど存在しないのですが、哀愁を帯びた琴線に触れる旋律と快活さが同居する独特の曲調が人気を呼び、世界中でクレズマーバンドが結成されるようになりました(人気の一因となったミュージカル「屋根の上のヴァイオリン弾き」は、偶然にもウクライナに暮らすユダヤ人の物語)。新倉さんは留学先のスイスで同級生が所属するクレズマーバンドの演奏を聴いてたちまち魅了され、現在はチューリヒに拠点を置くクレズマーバンド、ハイベ・バラガン(Cheibe Balagan)のメンバーとしても活動しています。ユダヤ伝承音楽とクラシック、一見すると遠い存在に感じられますがクラシックの作曲家・演奏家にもユダヤにルーツを持つ人物が多いのが事実(イスラエル生まれのヴァイオリニスト、イツァーク・パールマンはクレズマーのCDを出しています)。クレズマーはクラシック(特に弦楽器)にも通底している音楽といえるでしょう。

今回新倉さんはサン＝サーンスの〈白鳥〉やラフマニノフの〈チェロ・ソナタ〉第3楽章などクラシックの名曲に加え、無伴奏でクレズマーの演奏も披露してくれます。共演のピアニストは第4ステージで「東京六人組」でも出演する三浦友理枝さん。コンサートでの共演は初めてという2人が生み出す化学反応にも乞うご期待!

## 聖夜に響くメゾ&テノール

声楽ステージでは、近年オペラやコンサートで活躍目覚ましい2人の歌手をお迎えします。メゾ・ソプラノの小林由佳さんは茨城県桜川市(旧・岩瀬





小林由佳  
大槻孝志  
Aiko Suzuki

町)出身で水戸第三高等学校のご卒業。「茨城の名手・名歌手たち」第3回(1992年)、第8回(1997年)のオーディションに合格して演奏会に出演、「水戸の街に響け! 300人の《第九》」にはソリストとして1999、2000、03、04年にご出演いただいております、水戸芸術館とは縁の深い歌手です。今やオペラにコンサートに全国各地引っ張りだこの小林さんが、実に18年ぶりに水戸芸術館の舞台に登場します。

大槻孝志さんは「Il DEVO(イル・デーヴ)」のメンバーとしてもお馴染みのテノール。2016年の「ちょっとお昼にクラシック」でご記憶されている方もいらっしゃると思います。突き抜けるような輝かしい高音と、ホール全体を温かく包み込むような中音域が素晴らしく、その声を聴けばきっと心奪われてしまうはず。小林さんと大槻さんは過去にもデュオコンサートも開いていますので、ソロだけでなく息の合った二重唱にも期待が高まります。コレペティトゥアとして新国立劇場をはじめ数々のオペラの現場に携わり、歌手の呼吸を熟知する木下志寿子さんのピアノと共に、三位一体の演奏が繰り上げられることでしょう。

マスカーニの〈アヴェ・マリア〉やビゼーの〈アニュス・デイ〉、そして今年生誕200年のフランク〈天使の糧〉など、聖母や神、天使に捧げる曲を中心に構成されるこのステージですが、1曲目が聖と俗が交錯するオペラ《サムソンとデリラ》の“私の心はあなたの声に花開く”というのが選曲の妙。しかも多くのコンサートではメゾ・ソプラノのソロとして歌

われますが、今回はオペラに忠実に、サムソン役のテノールも加わる二重唱での演奏です。最後は、欧米の劇場においてクリスマスシーズンに欠かせない定番演目《ヘンゼルとグレーテル》の心穏やかな二重唱。オペラではヘンゼル役のメゾ・ソプラノとグレーテル役のソプラノが歌いますが、今回はメゾ・ソプラノとテノールのデュオ。いったいどのように響くのでしょうか、興味は尽きません。

### 名手6人が魅せる 多彩な音色のパレット



©Ayane Shindo

今年の「クリスマス・プレゼント・コンサート」を締めくくるのは、今大注目の管楽アンサンブル東京六人組のステージです。ソリストとして活躍するフルートの上野由恵さん、ホルンの福川伸陽さん、ピアノの三浦友理枝さん、そして東京交響楽団の首席を務めるオーボエの荒絵理子さんとファゴットの福士マリ子さん、読売日本交響楽団首席クラリネット奏者の金子平さんという、腕利きの同世代プレイヤー6人が集ったこのアンサンブルは2015年に結成されました。気になるこのグループ名の由来、「六人組」と聞いて「フランス六人組」を思い浮かべた方は正解です。東京で活動する六人が集まったということで、20世紀前半にフランスで活躍した「フランス六人組」(デュレ、オネゲル、ミヨー、タイユフェール、プーランク、オーリック)へのオマージュをこめて命名したとのこと。しかも、東京駅の改札口で終電間際に決まったというエピソードつき。そのノリの軽さと、高い演奏水準のギャップがなんとといえな

い魅力の1つでもあります。

彼らの演奏の魅力は何と言ってもその音色の多彩さ。ダブルリード同士であるオーボエとファゴットを除き、それぞれ違う原理で音を出す管楽器に加え、東京六人組にはピアノが入るので音色、音量、表現の幅はさらに広がりを見せます。そのような編成で名手が集まり、しかも同世代で自由闊達なやりとりが成されるアンサンブルとくれば鬼に金棒。実際彼らのCDは「レコード芸術」誌で特選盤に選ばれ、各地のコンサートでは大喝采を浴び、管楽器業界では異例ともいえる注目を集めています。

そんな東京六人組が最初にお届けするのは名刺代わりの1曲、フランスの作曲家ルーセルの〈ディヴェルティスマン〉。ももとの編成が木管五重奏+ピアノという貴重なレパートリーです。続くラヴェルの〈亡き王女のためのパヴァーヌ〉の原曲はピアノ曲で、作曲者自身によるオーケストラ版も有名ですが、この6人編成へのアレンジ版もオーケストラにもひけを取らない充実した音色が響きます。そして最後は、前述の《ヘンゼルとグレーテル》と並ぶクリスマスの定番《くるみ割り人形》の組曲からの抜粋。イヴの夜を舞台に繰り上げられるバレエの名曲で、聖夜のコンサートを華麗に締めくくります。

#### ■公演情報

#### クリスマス・プレゼント・コンサート2022

2022.12.24(土) 17:00  
全席指定 一般¥3,500、  
U-25(25歳以下)¥1,000

#### ●出演

池辺晋一郎(企画・おはなし)、NHK水戸児童合唱団、原田昌江(指揮)、田中直子(ピアノ)、新倉瞳(チェロ)、三浦友理枝(ピアノ)、小林由佳(メゾ・ソプラノ)、大槻孝志(テノール)、木下志寿子(ピアノ)、東京六人組(管楽アンサンブル)

#### ●曲目

レオントヴィチ:鐘のキャロル  
ポッパー:ハンガリー狂詩曲 作品68  
フンパーディンク(リーバーゲン編曲):  
オペラ《ヘンゼルとグレーテル》より「夜、私が眠るとき」  
チャイコフスキー(岩岡一志編曲):  
《くるみ割り人形》組曲 より 抜粋 ほか

# INFORMATION

※以下は10月6日現在の情報です。

公演等に関する最新情報は当館Webサイトにてご確認ください。

## チケット・インフォメーション

《11.26(土)発売分》

■**オルガン・レクチャーコンサートVol.6**  
2.23(木・祝) 19:00

■**小菅優(ピアノ)リサイタルシリーズ 第1回**  
2.26(日) 15:00

《12.17(土)発売分》

■**井上修 ピアノ・リサイタル**  
3.5(日) 14:00

■**ちょっとお昼にクラシック LEO(箏)**  
3.14(火) 13:30

■**パトリツィア・コパチンスカヤ  
ヴァイオリン・リサイタル**  
3.21(火・祝) 15:00

## 11・12月の主な音楽イベント

### コンサートホールATM

◆**0歳からのわくわくオルガン・コンサート**

11.5(土) 15:00

料金[全席指定] 子ども(0歳~小学生)¥500/一般(中学生以上)¥1,000

◆**店村真積 ヴィオラ・リサイタル**

11.12(土) 16:00

料金[全席指定] 一般¥5,500/U-25(25歳以下)¥1,800

◆**内田光子(ピアノ) & マーク・バドモア(テノール)**

11.17(木) 19:00

料金[全席指定] A席¥12,000/B席¥10,000

◆**《300人の第九》出演者によるミニ・コンサート**

12.11(日) 13:00

[10/29\(土\)チケット発売](#)

料金[全席指定] ¥1,000

◆**クリスマス・プレゼント・コンサート2022**

12.24(土) 17:00

料金[全席指定] 一般¥3,500/U-25(25歳以下)¥1,000

### エントランスホール

◆**ミシェル・ブヴァール オルガン・リサイタル**

11.13(日) 19:00

料金[全席指定] A席¥4,000/B席¥3,500/U-25(25歳以下)¥1,500

◆**パイプオルガン・プロムナード・コンサート(入場無料/要事前予約)**

□11.19(土) 13:00~13:30 大谷内映

□11.27(日) 11:00~11:30/12:30~13:00 趙三川

□12.17(土) 11:30~12:00/13:00~13:30 金子雄太

□12.25(日) 13:00~13:45 中田恵子、城えりか(ソプラノ)★クリスマススペシャル

◆**プロムナード・コンサートEXTRA(入場無料/要事前予約)**

□12.4(日) 森田 風(ピアノ) 12:00~12:45 [予定枚数終了](#)

2022年10月11日発行(第252号)

編集:水戸芸術館音楽部門 | 中村晃、関根哲也、高巢真樹、篠田大基、鴻巣俊博、高木春佳

発行:(公財)水戸市芸術振興財団 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8118(音楽部門)

Tel.029-231-8000(チケット予約センター 9:30~18:00・月曜休館) <https://www.arttowermito.or.jp/>

デザイン:K5 ART DESIGN OFFICE. 印刷製本:山三印刷株式会社

## 編集後記

普段はイタリア・オペラ派ですが、秋、冬にはドイツ・リートを聴きたくなります。《白鳥の歌》の有名な〈セレナーデ〉を聴くと、寒空の下を長いコートを着て歩くイメージが思い浮かび、グリューヴァインが飲みたくなります。(鴻)

先日、F.グルダがシューベルトのリート(さすらい人)をピアノに編曲して弾いた録音を聴いていて、身体が冷え込むような不思議な感覚をおぼえました。吉田秀和館長も紹介されていた演奏。リートの世界に浸りたい秋です。(篠)

昔は針針の蓄音機でカベの演奏をくい入るように聴いたものだ、と熟っぽく語っていた吉田光男副理事長。私もようやくカベの良さがわかるようになったところでした。長年にわたる多大なるご功績を偲び、心よりご冥福をお祈りいたします。(て)

Lucky FM 茨城放送「水戸芸術館 presents みんなのクラシック」

毎週日曜 7:30~8:00

パーソナリティ:石井哲也アナウンサー

出演:音楽部門学芸員(月替わり)

学芸員がおすすめの曲をご紹介します、クラシックの魅力をお届けする番組です。

▼Lucky FM ウェブサイト <https://lucky-ibaraki.com/>

▼radiko(ラジコ)でもお聴きいただけます <https://radiko.jp/>



好評  
放送中!

## 演劇・美術のイチオシ企画!

### ACM劇場

◆**ACMファミリーシアター 「スーホの白い馬」**

11.19(土)、20(日)、23(水・祝) 各日11:00~/15:00~/

原作:「スーホの白い馬」大塚勇三 再話 福音館書店



前回公演より(撮影:刑部アツシ)

【脚本・演出】長谷川裕久

料金:[全席指定]おとな¥2,500/

こども(小学生以下)¥1,200

出演:福丸敦子、根本紳平、岡野一平、

青木志穂、川崎賢一、塩谷 亮、小林祐介、

吉田彰文、倉金 春

### 現代美術ギャラリー

◆**中崎透 フィクション・トラベラー**

11.5(土)~1.29(日)

[休館日]月曜日(祝日の場合は翌火曜日)

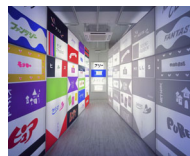
年末年始(2022年12.27(火)~2023年1.3(火))

[開場時間]10:00~18:00

(入場は17:30まで)

[入場料]一般¥900/団体(20名以上)¥700

高校生以下/70歳以上、障害者手帳などをお持ちの方と付き添いの方1名は無料



中崎透(color or white)2007 撮影:榎場大

### 『水戸芸術館パイプオルガン活動記録集

1990~2021 つくる、かなでる、ひろがる』

当館のパイプオルガンにまつわる31年分の活動をまとめた記録集を刊行しました。当館メンバーズでご希望の方にはエントランスホール・チケットカウンターでお1人様につき1冊、お渡ししています。またWebサイトでもPDFでご覧いただけます。



シューベルトの  
リートの中では  
《酒の歌》D888が  
一番好きだなあ。



ここ数年の11、12月は紅葉もイルミネーションも見に行けていません…。今年こそはどちらも見に行きたいですが、それよりもスノーボードをやってみたく欲が!! 今年の冬はゲレンデマジックにかかりに行きます!!(笑)(春)

Lucky FM「みんなのクラシック」、10月のテーマは「クラシックを聴きたくなる一冊」です。クラシックに興味をお持ちになるきっかけは様々だと思いますが、作家たちが紡ぎ出す瑞々しい言葉もまた、最高の導き手ではないでしょうか。読書の秋に、ぜひ。(樹)

当財団の吉田光男副理事長が9月17日に逝去されました。佐川一信元水戸市長、吉田秀和初代館長とともに水戸芸術館の礎を築かれました。副理事長は、水戸室内管弦楽団の活動にも大きな支援と愛情を与えてくださいました。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。(中)